

「創業の志」に返る

副会長 安田善次

(関東自動車工業㈱)・代表取締役会長



創業者 佐久間一郎の熱意

百年に一度と言われる世界同時不況が始まって以来、弊社も含め、車体工業会の各社もかつて経験したことのない経営環境に晒されていると思います。こうした環境の中、よく「原点回帰」という言葉を耳にしますが、そんな時、私は、創業の志や熱意について思いを致すようにしています。

弊社の創業者、佐久間一郎は、中島飛行機の技術者であり、終戦後は、地元横須賀の再生を期すため、新しい事業を興すことが世のため・人のためになるとの使命感、そして以前欧米で自動車工場を視察した経験を活かし、自動車製造に挑戦しました。これは、まさにベンチャー精神そのものであり、進取の気性や気概を感じるどころです。

佐久間の志は、当時の最大の課題であった工場用地の取得においても存分に発揮されました。横須賀を直轄する米軍基地司令官デッカー海軍大佐に会社設立の趣旨を率直に熱意を込めて説明し、その後、見事に用地取得を実現したのです。しかし、資材不足により、その後の事業は窮状が続いておりました。そんな時、デッカー司令官の協力もあり、米軍払下げトラック・バスの改装を受注することが出来ました。航空機の機体製造に従事し、板金の経験を持つ従業員にとって、改装はそう難しいものではなく、これが車体メーカーへと発展する第一歩となったのです。

「変革期」にある現在の日本

現在の日本は「変革期」にあると言われています。世界経済は、減税や補助金といった各国の諸施策により、若干の落ち着きを見せてはいるものの、現実には、リーマンショック以降、あまり変わっていないように感じられます。国内自動車業界、その中でも私たち車体業界を取り巻く環境は、大型・中型トラックの新車需要が激減し、底打ち感はあるものの低迷状態が続いており、依然として先が見えない状況にあります。一方で、CO₂削減や廃棄物処分量削減、VOC排出抑制、商用車架装物リサイクルなど、業界として環境問題にも着実に取り組んでいく必要があります。

このような状況下では、従来の延長線で経営を考えるのではなく、新たな時代に向け、あるべき姿を描き、経営を変革していくことが肝要であると思っています。その際、「創業の志」や高邁な「理念」に思いを致すことは大変役立つと思います。「生きるか死ぬかの時に何を青臭いことを」という言葉が聞こえてきそうですが、業績が低迷して社員が動揺しがちな時ほど、トップは会社が守るべき価値観を社員に伝える必要があります。冒頭で弊社の歴史を振り返ったのも、創業者の薫陶を受け、私たちの心に刻み込む必要があると思ったからです。

「創業の志」に返る時

弊社の創立趣意書は、いかにも往時を偲ばせる古い表現ですが、現在も佐久間一郎の使命感を直截に訴える光を失っていないと思います。

- 一、交通運輸機関ノ回復整備
- 二、自動車ト燃料問題
- 三、電気自動車ノ実用化…

佐久間一郎は、使命のおもむくところ、終戦直後のガソリン不足の中、バッテリーを動力源とする電気自動車でいこうと考える柔軟性を持ち合わせていました。これは、経営環境が悪いことを決して言い訳にしない創業者の器量・度量の大きさを感じるころでもあります。

多くの企業は、創業の志を受けた「理念」の中に“世の中への貢献”や“顧客指向”を掲げていると思います。いつの時代であっても「価値あるモノづくりにチャレンジし、市場やお客様を満足させ続けること」が時代を打開する最良にして唯一の方法であると思います。車体業界も、こうした原点に戻り、お客様のニーズにすばやく柔軟に応えられるモノづくりに取り組む必要があると考えています。さらに、人と地球にやさしい、サステナブルな循環型のモノづくりが必須になると思います。

私たちも、それぞれの先人達の志に返り、草創期から受け継がれてきたスピリッツを絶やすことなくモノづくりへの熱意を燃やし、この難局を乗り越えていきたいと思っています。